様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月　 ５ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２３９１

研究課題名（和文）詩人エメ・セゼールの世界性と新たな文学的〈界〉の誕生

研究課題名（英文）The world characteristics of the poet Aime Cesaire and the birth of a new literary field

研究代表者
立花　英裕（Tachibana, Hidehiro）

早稲田大学・法学学術院・教授

研究者番号：８０２０７０５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：エメ・セゼールはネグリチュードの詩人として、第2次世界大戦後の反植民地主義や植民地独立の運動の中で活躍し、それ以降は時代遅れになったという見方があるが、本研究によって、彼の活動が雑誌に依拠しつつ、演劇分野にまで広がっていく中で、従来のフランス文学から自律した独自の言語空間（ブルデューの用語でいえば強力な象徴資本が蓄積されたトランスナショナルな言語的社会空間）を切り拓き、後のフランス語圏文学の自律空間を確立したことを検証した。トランスナショナルな言語空間研究の中で、雑誌『プレザンス・アフリケー』、ルネ・ドゥペストル、ダニー・ラフェリエール、ガストン・ミロンなどの研究成果も生み出すことができた。

研究成果の概要（英文）：Aime Cesaire is a poet of "Negritude". He was active in the anti-colonialism and colonial independence movement after the Second World War, and there is a view that it became outdated today, but, while his activities relied on magazines and expanded to the theatrical field, we opened up an original linguistic space autonomous from traditional French literature (speaking in terms of Bourdieu, a transnational linguistic social space with strong symbolic capital accumulated), and verified that our poet established an autonomous space of later French-speaking literature. In related transnational linguistic space research, I could also produce research results such on the magazine "Presence Africaine", Rene Depestre, Dany Laferriere, Gaston Miron, etc.

研究分野：人文学

キーワード：ネグリチュード　反植民地主義　象徴資本　トランスナショナル　フランス語圏　フランス文学

１．研究開始当初の背景

エメ・セゼールは、いわゆるネグリチュードの詩人であり、第 2 次世界大戦後の反植民地主義や植民地独立の運動の中で活躍したことで知られるものの、1970 以降、時代遅れとなったと見なされる傾向がある。しかし、最近のフランス語文学研究でもっとも重要視されている作家の一人エドァール・グリッサンや、あるいは『黒い肌、白い仮面』の著者として知られるフランツ・ファノンのような文学者・思想家にセゼールが与えた影響は甚大なものがあり、彼らの書くものの中にしばしばセゼールの影が感じられる。また、最近のフランス語圏の若手文学者、たとえば個人的な交流のあるジュリアン・デルメールが典型だが、セゼールを日常的に読んでいる人が少なからずいる。最近アカデミー・フランセージの会員になったダニー・ラフェリエールは小説『帰還の謎』でメディシス賞を受賞しているが、この小説がエメ・セゼールの『帰郷ノート』から発想の多くを負っていることは明白である。こうした現代フランス語圏文学の状況を見渡したとき、エメ・セゼールの存在の大きさを感じるのである。本研究の出発点には、そのような個人的認識がある。

２．研究の目的

本研究が明らかにしようとする諸点を箇条書きにすると、以下のようにまとめられる。

(1) エメ・セゼールは、フランス語圏文学の言語を確立した文学者の 1 人である(おそらく最重要な文学者)。

(2) 第 2 次世界大戦までのフランス語圏の文学者は、フランス文学への従属性がきわめて強く、フランス本国の文学者や出版社に認められなければ目立つ活動できなかった。そのような状況を変えた文学者の一人としてエメ・セゼールが挙げられる。

(3) エメ・セゼールの文学はトランスナショナルな性格をもち、ナショナルな枠組みを脱した世界性を獲得している。

(4) フランス語圏文学の自律的な言語形成においては、『プレザンス・アフリケーヌ』のような広い影響力をもった雑誌な大きな役割を果たした。

(5) 雑誌に依拠した活動によって、エメ・セゼールはどのような文学言語を、どのような批評精神の裏付けによって、創造したのか。

３．研究の方法

（1）研究方法

ピエール・ブルデューの〈界〉の理論を参照しつつ、具体的には、現地調査を数回行い、研究書などの文献リサーチを進め、そしてなによりもエメ・セゼールのテキストを読みこむことによって、研究課題に迫っていった。国内外の研究者との交流・情報交換も重要であり、積極的に内外の研究会、シンポジウム、コロックに参加し、最後の年度の 3 月には、東京の日仏会館やフランス政府の機関アンデンティティ・フランセと共同で大規模な国際コロックを開催した。早稲田大学の組織としては、現代フランス研究所が主催者として参加した。

エメ・セゼールの世界性を明らかにするためには、トランスナショナルな言語空間の研究が不可欠である。そこで、セゼールプロパーに研究に平行して、雑誌『プレザンス・アフリケー』、雑誌創刊者アリウユ・ジョップ、ルネ・ドゥペストル、ダニー・ラフェリエール、リオネル・グルー、ガストン・ミロン、ルネ・マランなどについても研究を進めた。

文学研究においては、翻訳も不可欠な研究方法であり、研究成果でもあり、その作業にも力をいれた。

（2）現地調査・文献リサーチを行った主な場所:

2016 年 3 月フランス・マルティニック島。県立資料館・シェルシェール図書館・アンティル大学

2017 年 3 月フランス・マルティニック島。県立資料館・シェルシェール図書館

４．研究成果

（1）「研究目的」で述べた諸点は、テーマとしても多岐にわたり、領域的にもきわめて広い分野を含んでいる。したがって、その研究成果は道半ばであることは間違いないが、しかし、先行研究を踏まえつつも、新たな成果をもたらしえており、それも国際的なレベルでそのようなことが言えるのではないかと考える。少なくとも、2017 年に行った研究発表に対する外国の研究者たちの反応からそれを感じたことを記しておきたい。ここでは、「研究目的」で述べた諸点について述べるよりは、そうした当初の目的を越えた重要な成果について、少し詳しく記しておきたい。それは、エメ・セゼールが『プレザンス・アフリケーヌ』を拠点にして活動する中で展開していった演劇作品についてである。

雑誌『プレザンス・アフリケーヌ』にとって 1955 年は特別な年で、この年からエメ・セゼールが雑誌に連続的に寄稿しはじめる。セゼールは、アリウヌ・ジョップときわめて親しくなり、多くの企画が二人の連携によって進められるようになる。エメ・セゼールは、1945 年以来共産党に留ま

って活動することに限界を感じていたのだが、カトリック系のアリウヌ・ジョップに接近することによって、新たな境地を開いているのである。この二人の関係は、サルトルらライックな知識人とカトリック系の知識人がアルジェリア戦争をめぐって共闘した関係に似ている。ただ、『プレザンス・アフリケーヌ』の特異なところは、政治的な論争が沸騰していた時期に政治論争を避け、文化論争に頁を割いたことである。その代表的なものが、1955 年の新しいシリーズと共に開始された国民詩論争である。この論争に、『プレザンス・アフリケーヌ』は、なんと 1955 年の１－２合併号から 1956 年の 11 号まで、途中、多少中断があるが、継続して紙面を提供しているのである。なぜこれほどまでに国民詩にこだわるのだろうか。

ところで、1956 年 9 月にパリのソルボンヌで開催される第 1 回黒人作家・芸術家会議で、エメ・セゼールは「文化と植民地支配」と題した講演を行うが、そこで問題にしていることも、同じ文化の問題だった。ただ問題の立て方はかなり違っている。この講演でエメ・セゼールは、植民地が固有で、かつ近代的なネイションとしての文化をもつには、植民地支配を脱しなくてはならないと訴えている。そして、独立後に新たな文化を創造するにはどうすればよいのかを問題にしている。エメ・セゼールは文化について普通とはかなり違った特異な見解を表明している。文化とは才能ある芸術家や知識人が主体的に創造していくものではなく、ちょうど、樹木が生え、繁っていくように自然に形成されるものだと言うのである。言い換えれば、文化は民衆が創るものなのである。文化は民衆が創るものであり、共同体が創るものであるというのは、何を意味するのだろうか。

ここで注目すべきは、エメ・セゼールの演劇作品である。実は、彼には演劇の構想は非常に古くから温めており、第 2 次世界大戦中にマルティニック島で雑誌『トロピック』に詩を発表していた時期から演劇的な要素を含んでいる詩作品を書いているのである。それが、彼がオラトリオと呼んでいた長編詩『そして犬たちは黙っていた』である。この作品は、終戦直後に刊行される詩集『奇跡の武器』の後半に収録され、頁数にして詩集の約半分を占めている。

セゼールは、1960 年代に入って 3 つの演劇作品を次々に発表している。『クリストフ王の悲劇』（63 年）、『コンゴの一季節』（66 年）、『もう一つのテンペスト』（69 年）である。これらの演劇作品には共通したテーマが窺われる。そこには、いかにして独立後に新たな国を建設していくかという問いが見え隠れするである。ただ、セゼールにおいて特徴的なことは、この問いが、政治的な問いというよりは文化的な問いとして出されていることである。新たな共同体の建設においては民衆が一つの文化を共有しなくてはならない。なぜなら、民衆がしっかりした社会的絆で結ばれなければ、どんなに近代的な制度を持ち込もうともそれは砂上の楼閣だからである。この社会的絆こそ文化の核心であり、それは指導者が捏造して民衆に押しつけるものではなく、共同体の内在的構造としてなんらかの力によって自然に形成されなければならないのである。この力をセゼールは生命力とも、あるいはアフリカ学者のプロベニウスの言葉を借りて、パイデューマとも呼んでいる。いずれにしても、社会的絆は人工的に作れるものではない。

このような社会的絆は、共同体内に調和した象徴交換が作動していなければ形成されないとも、エメ・セゼールは考えていたようである。つまり、マルセル・モースの言う贈与の論理が働かなくてはならないのである。ところで、この論理が働くにはポトラッチに見られるように、誰かがなんらかの意味で自己を犠牲にしてなくはならない。もっともエメ・セゼールにおいては、社会的絆を生み出すのは、英雄の死である。エメ・セゼールの演劇を検討していくと、英雄の死によって共同体の社会的絆が生まれると読めるのである。エメ・セゼールの演劇作品は、どれも英雄の殺害によって終わっている。

そして、たとえば、『そして犬たちは黙っていた』においては、それが古代エジプトの宗教に結びつけられている。彼は、フレイザーの『金枝篇』を読み込んでいて、それを演劇作品の中に取り込んでいることが最近分かってきている。『そして犬たちは黙っていた』の犬とは、古代エジプト宗教において崇められていたアヌビス、すなわち犬の頭をもち、死者を守る役割をもつ神である。このことは、セゼール自身が 1969 年のインタヴューの中ではっきり認めている。「悲劇のタイトルの犬は、エジプト神話から来ています。こうして、叛逆者は、植民地において変容した植物神の姿となるのです。この神は死ななくてはなりませんが、それは新たに生き返るためなのです」。エメ・セゼールは、「生き返る」と言うが、これは殺害された英雄がもとの姿のままに生き返るという意味ではなく、民衆の心の中に再生するという意味である。古代のエジプト人は黒人であったという説があるわけで、ネグリチュードの詩人エメ・セゼールにとって、古代エジプト文明は黒人のアフリカ文明に他ならない。エメ・セゼールの悲劇論は、ニーチェの『悲劇の誕生』に一つの起源をもっている。ところで、古代ギリシャの起源がエジプト文明にあるとするなら、ギリシャ悲劇的な演劇の再生はアフリカ文明の再興にほかな

らないのである。ここに、エメ・セゼールの語る「アフリカ」がどのようなものであったのかが見えてくる。エメ・セゼールの文化論は、評論や講演だけでなく、詩や演劇作品においても展開されており、そうした作品の内的構造を更に分析していくことが求められているし、そこにこそ、エメ・セゼールの世界性が求められる。

（2）エメ・セゼールと深い繋がりがある20世紀の作家について幾つかの翻訳、研究を行った。主なものとしては、ルネ・ドゥペストル『ハイチ女へのハレルヤ』（2018年）、ダニー・ラフェリエール『エロシマ』（2018年）があり、比較的詳しい「あとがき」において作家研究を書き、20世紀のフランス語圏文学の状況をある程度明らかにした。ガストン・ミロンについても、論文を発表した他、彼の詩の翻訳も行ったが、刊行までに少し時間がかかりそうである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　9件）
①TACHIBANA Hidehiro « Alioune Diop et Aimé Césaire », *Présence Africaine,* Paris（編集中）

②立花 英裕、植民地としてのアメリカと世界文学、ケベック研究、査読無、10号、2018、82-84

③立花 英裕、世界文学から見た〈静かな革命〉(シンポジウムの趣旨と概要)、ケベック研究、査読無、10号、2018、26-43

④立花 英裕、ガストン・ミロンとローランティド、ケベック研究、査読有、9号、2017、70－74

⑤立花英裕、エメ・セゼールの演劇言語、日仏演劇協会会報、査読無、第7号、2017、8-10

⑥立花英裕、リオネル・グルーと両大戦間のフランス系カナダ・ナショナリズム、ケベック研究、査読有、8号、2016、26-43

⑦TACHIBANA Hidehiro « Identité et langage en Martinique », *Revue Japonaise de Didactique du français*, 査読無, vol.11, nº 1-2, 2016, 368-372.

⑧TACHIBANA Hidehiro « Dany Laferrière, masque d'un romancier », *Interculturel Francophonies,* 査読無, nº 30; *Dany Laferrière : mythologie de l'écrivain, énergie du roman,* Alliance Française de Lecce, 2016, 105-123.

⑨立花 英裕、ロベール・シャルボノーとフランス・レジスタンス派との論争を巡って、ケベック研究、査読有、7号，2015、50－66

〔学会発表〕（計　12件）
①立花 英裕、叫びと揺れ－セゼールとグリッサンにおける共鳴の詩学（同時通訳付）、早稲田大学現代フランス研究所/日仏会館主催国際シンポジウム「世界文学から見たフランス語圏カリブ海」、2018/3/25、日仏会館（東京）

②立花 英裕、植民地としてのアメリカと世界文学、日本ケベック学会 2017 年度全国大会、2017/10/14、早稲田大学（東京）

③立花 英裕、アリウヌ・ディオップとエメ・セゼール（同時通訳付）、東京外国語大学主催国際シンポジウム「『プレザンス・アフリケー』研究－超域的黒人文化運動の歴史、記憶、現在」、2017/8/22、東京外国語大学（東京）

④TACHIBANA Hidehiro « Aimé Césaire et Gaston Miron : poétique de décolonisation », CIEF (Conseil international des Études francophones), 2017/06/30, Université des Antilles (Martinique, France)

⑤TACHIBANA Hidehiro « Aimé Césaire ou résistance archipélique », Colloque international Les représentations sociales des îles dans les discours littéraires, 2017/03/29, Centre universitaire de Mayotte (Mayotte, France)

⑥立花 英裕、ガストン・ミロンとローランティド、日本ケベック学会 2016 年度全国大会、2016/10/08、明治大学（東京）

⑦立花英裕、エメ・セゼールの演劇言語、日仏演劇協会、2016/6/18、専修大学（東京）

⑧TACHIBANA Hidehiro « Quête d'un champ littéraire : Aimé Césaire et Alioune Diop », CIEF (Conseil international des Études francophones), 2016/05/26 (Saly-Portudal, Sénégal)

⑨TACHIBANA Hidehiro « Identité et langage en Martinique », Société japonaise de didactique du français, 2015/11/21, Université Seinan gakuin (福岡)

⑩立花英裕、両大戦間におけるフランス系カナダ・ナショナリズム－リオネル・グルーを中心に、日本ケベック学会 2015 年度全国大会、2015/10/3、跡見学園女子大学（東京）

⑪立花 英裕、マルティニクの歴史と文化、早稲田大学現代フランス研究所、2015/7/6、早稲田大学（東京）

⑫TACHIBANA Hidehiro « Le langage et le transculturel chez Aimé Césaire et Édouard Glissant», CIEF (Conseil international des Études francophones), 2015/06/08, Univerisité Saint-Boniface (Winnipeg, Canada)

〔図書〕（計　3 件）

① TACHIBANA Hidehiro, Éditions du Cerf, « Aimé Césaire ou résistance archipélique », Buata B. Malela, Andrzej Rabsztyn et Linda Rasoamanana (dir.), *Les représentations sociales des îles dans les discours littéraires francophones*, Paris, 2018, 303-317**（印刷中）**

②ルネ・ドゥペストル、水声社、ハイチ女へのハレルヤ（共訳による翻訳とエメ・セゼールとの重要な関係に触れる解説）、2018 、234

③ダニー・ラフェリエール、藤原書店、エロシマ(翻訳とあとがきでの作家論)、2018、200

６．研究組織

(1)研究代表者

立花 英裕（TACHIBANA Hidehiro）
早稲田大学・法学学術院・教授
研究者番号：８０２０７０５０